ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理　Monthly Bulletin　Vol.27 No.11 November 2026

天理大学 おやさと研究所　Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

11

CONTENTS

・巻頭言
「元初まりの話」の読まれ方・その８
／井上　昭洋 1

・天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」（24）
ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑬
／加藤　匡人 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（34）
災害復興における独立系メディア
／山西　弘朗 3

・教内の福祉の歴史（６）
福祉の歴史における時期区分の意義
／松原　浩一郎 4

・日本占領期の香港―植民地研究の視点から―（12）
「私立」学校制度の形成
／山本　和行 5

・ブラジルの宗教的風景（17）
アンテベラム期の米国系プロテスタント教会による布教活動⑪
／中西　光一 6

・おやさと研究所ニュース 7
日本宗教学会第 85 回学術大会で発表
／第 390 回研究報告会（９月 29 日）
／ 2027 年度公開教学講座のご案内／
2026 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その８

おやさと研究所長　井上昭洋　*Akihiro Inoue*

前号の巻頭言では、蔵内数太の「元の理」研究、特に六柱の道具衆をめぐる彼の層位論的解釈を紹介した。その内容を思い返しつつ、かぐらづとめにおけるつとめ人衆の配置を念頭においてお付き合いいただきたい。

蔵内によれば、ふぐ（たいしよく天のみこと・艮[北東]）は、死という世縁の切断に加えて胎縁の切断、すなわち母体との断絶による個体の確立を司る。その対極の方位に位置するかれい（かしこねのみこと・坤[南西]）は、コミュニケーション・言葉によって人をつなぎ合わせるという社会性を司る。彼はさらに層位の視点を導入する。すなわち、ふぐが生命の個体性を意味するのに対し、同じ植物的層に属する同伴者としてのしゃち（月よみのみこと・乾[北西]）は生命力を意味し、それはふぐの個体性に対する機能性と呼ぶべきものだというのだ。

また、蔵内は、かめ（くにさづちのみこと・巽[南東]）が平たい安定した形で、甲羅に身が覆われることから、自己維持（皮つなぎ）・消極的な自己アイデンティティを象徴するのに対し、対極のしゃちは積極性を象徴すると解釈する。一方、かめと同じ人間的層に属するかれいは、言葉を司り、人間の思考・知識を象徴し、観念を結合して人間の自覚（アイデンティティの確立）を促す同伴者と考える。

このように彼は、対極の方位を占める道具同士の相対する性質、同じ層位に属する道具同士の同伴者としての性質を指摘する。なお、うなぎ（くもよみのみこと・東）とくろぐつな（をふとのべのみこと・西）も、互いに同じ動物的層に属する一対である。蔵内は、うなぎを行動の自由を与えられた主体性の象徴とし、くろぐつなを他人によって引き出され庇護される依存性の象徴と捉える。こうして自由でありながら他者に依存する人間存在に両者の同伴性を見出す。だが、うなぎの主体性とくろぐつなの依存性は、そのまま相対する性質と言うこともできる。両者は、同じ層位に属すると同時に対極の方位にあるという、両義的な関係性を持つのだが、蔵内はその点に十分な注意を払っていないように思われる。

さて、前回に提示した素朴な疑問について考えてみたい。水 / 火、皮つなぎ / 骨つっぱり、種 / 苗代というように三つの明確な対概念を構成する「元初まりの六台」の六柱とは異なり、残りの四柱、すなわち二つの対（くもよみのみこと・かしこねのみこと、たいしよく天のみこと・をふとのべのみこと）は、なぜ対極の方位に配されていないのか。蔵内の層位論は、この二つの対の非対極性については答えない。だが、層位構造が方位配置より優先される原理であれば、それゆえに対極の方位に配されなかったと考えることはできる。

私なりに考えると、この二つの対は、同じ機能領域（身体の基本機能、出産における役割）の分担関係にあることで結びつく対であり、明確な対概念を構成しない。それゆえ、必ずしも対極の方位に配される必要がないと解釈できる。一方、蔵内の解釈に触発されて考えれば、四柱の対峙する対にも、相対する意味を見出すことができる。ふぐは内側から毒で切るが、かれいも言葉や風で、かまいたちのように外側から切る。また、ふぐの胎縁切断は次世代への縦の継承を、かれいの言葉は同時代の横の繋がりを意味する。六柱（「元初まりの六台」）と異なり、十全の守護の説き分けでは明示的ではないその相対する意味をこのように読み解くことができる。

蔵内の「元初まりの話」の解釈は、名人芸とも評されるレヴィ＝ストロースの神話の構造分析を思わせる。ただし、物語の中に対立軸を見出して神話素を並べていくのではなく、『易』という既存の体系に道具衆を落とし込んでいく点で異なる。彼の層位論でも説明しきれない部分があることは見たとおりだが、それはまた「元初まりの話」が一つの読みに収まらない重層性を持つ開かれたテクストであることの証左でもある。